

情勢報告

改めて考えよう、ナス経営～川北地区地区会～



「今は 18t / 10a 穫らないと、経営が厳しい」という講師の話に、「うんうん」とうなずく参加者

１月１８日（木）川北地区地区会が開催され、現地検討会および経営講習会に、約 30 名のナス生産者が参加した。

現地検討会ではナス 3 圃場の他に、川北地区で昨年からの栽培が始まった施設アスパラガスも見学。高齢化対策の有望品目として生産者の注目も高く、栽培方法や収量について熱心な質問が飛んでいた。

その後、振興センター職員が講師となり「改めて考えるナス経営」と題した経営講習会を開催。地区会で『経営』について講習を行うのは初めての試みであったが、参加者からも好評で「こんな分かりやすい講習会は初めて」「今度は奥さん達にも聞いてもらいたい」といった意見が寄せられた。

今後も、生産者の『気づき』の場となるような、実のある地区会を継続してゆきたいと思っている。

ハスイモの安定収量にむけて



有望品目導入・定着推進事業で取り組んでいるハスイモは、野菜全体の安値の影響で、本園芸年度は販売当初より単価安の傾向で苦戦を強いられてた。１２月には近年にない高単価となったが、高値は長く続かず、現在では市場単価で 600 円 / kg となり、生産者にはやや苦しい単価となっている。栽培では、昨年 12 月のような寒波もなく、暖冬であるため夜温を適温で管理し安定した収穫量を確保するように巡回指導している。

園芸野菜の消費拡大



安芸市施設園芸品消費拡大委員会は生産者、ＪＡ、園芸連、市、振興センターで構成され、年間 20 回以上の出前授業や料理講習、試食販売、なす祭りでの販促活動を行っている。

20 日、高知市横内小学校のふれあいまつりに参加して、生産者が中心となってナス料理等の試食を行った。反省点として、試食の献立は試食会を繰り返して選ばれた人気メニューを提案する、野菜によるダイエット料理を P R する、鍋やフライパンひとつで出来る料理を考案する、郷土料理も視野に入れる、出前授業と組み合わせして実施すると効果があるなどがわかった。今後は、生産者自らが積極的に消費拡大活動に取り組むように、ＪＡ農業団体に提案していく。

安芸市伝統野菜「入河内大根」の試食会



地域の「入河内大根のこそう会」が大根の収穫適期(1月)になり、おいしさをPRするためのレシピ作りの試食会を開いた。おでんやなますの従来からの食べ方と新たにトマト煮、韓国風煮物など12種類作成された。会員や関係者が試食し、「かみしめがあるのが特徴」「なますには赤い部分も使うときれい」「大根餅は意外に美味しい」と意見が出た。今後は「種」の選抜や保存、レシピ作りなどに取り組む。

農業基礎講座生(有)ハッピーファーム見学



1月の農業基礎講座(現地研修)を開催し、(有)ハッピーファームの見学を行った。参加者3名は、(有)ハッピーファーム代表者萩野氏より、ミニトマト栽培をはじめたきっかけや、4月からこれまでの栽培経過について説明を受けた。

「栽培方法や労働管理をもっと改善し、これからの園芸農業に挑戦しています。(トマトの葉を見せて)この葉ひとつひとつが化学工場のような働きをしていて、トマトの果実を作っています。」と目を輝かせて説明する萩野氏と若い後継者でもある参加者は、熱心に意見交換をしていた

第4回ナス「土佐鷹」研究会を開催。



22日、センター主催の土佐鷹研究会を開催した。県下から約50名の参加があった。この日は、安田町の4圃場を巡回し、その後、唐浜出荷場で意見交換をおこなった。現地では、センター職員により、それぞれの圃場についての管理概要と生育概況の詳しい説明があった。意見交換会では、大月町、土佐市、香南市の参加者から、各地の生産状況についての報告があった。取り組みがすすんでいることに、むしろ地元の生産者が勇気づけられていた。また、安芸出荷場の生産者から、東京市場の視察報告があった。「土佐鷹は品質がよい。漬け物にしても旨い。すべてこの品種に変えては!!」との市場関係者の声が紹介された。管内の面積は約7ha、来年度は30haが目標である。今後に弾みを感じさせられる会であった。